

## Ⅳ 産業構造の変化と貿易・投資の役割

平田 章・長田 博

### 1. 工業化の構造変化

80年代にアジア NIES は多くの困難があったにもかかわらず、着実な成長をみせた。このような発展は、よく「輸出主導」型成長と説明される。しかし、近年その成長形態は輸出への依存を相対的に低下させつつある。輸出主導型成長の成功自体が、その体制の継続に逆効果を及ぼす要素を生み出しているようである。高所得と多角化された産業構造が達成された結果、輸出主導型政策の意味が相対的に低下する段階に到達した。“卒業”が今やアジア NIES にとっての課題である。

アジア NIES の製造工業部門のシェアは GDP の約30%で、工業部門の拡大よりもサービス部門の拡大が目立つのが最近の傾向である。とはいえ、韓国、台湾では製造業はいまだに平均成長率より早く伸びており、工業発展は、1990年代においても間違いなく依然重要な役割を果たすだろう。

80年代の前半、ASEAN 全体の輸出成長率は-0.1%であった。この輸出の伸びが低下した唯一最大の理由は石油・その他一次産品価格の低落である。しかし工業製品輸出は1970年代に次第に増加し、多かれ少なかれ拡大基調を維持し、低迷する一次産品輸出を補った。したがって、この意味で ASEAN 4 カ国は1980年代の輸出主導型発展の道を成功裏に歩んで来たといえる。輸出促進と一体となった工業化は ASEAN 諸国にとって今後も引き続き主要な発展の源となるだろう。

これに対して、ラテンアメリカは世界経済の後退で大きな打撃を受けた。1970年代の活発な工業発展は巨額の借款流入と密接に関連していた。1980年

代には金利が上昇し、累積債務問題が顕在化したため厳しい経済困難が生じた。累積債務に対処するために、平均で3分の1、国によっては2分の1、輸入を削減しなければならなかった。またインフレの進行は、すべての国で発展に不利な影響を与えた。

## 2. 輸出主導型成長

### (1) 輸出工業化－供給要因

輸出主導型成長は輸出拡大の速さと工業製品輸出の増加とで表される。アジア発展途上国の輸出工業化率（総輸出中の工業製品比率）をみると、絶対水準は大きく違うが、すべて（中国を除く）輸出工業化率に上昇傾向がみられる。1984～85年には、その比率はアジア NIES で90%以上である。ASEAN 4 カ国はこの点で NIES に遅れをとっているが、急速な上昇傾向は1980～85年の世界経済の低成長期にも認められている。輸出工業化率の上昇は地域間貿易のパターンを変える一つの推進力であるといえる。

ラテンアメリカでは1970年代にこの点で大きな進展があった。80年代には外貨を緊急に必要としたにもかかわらず、輸出は鈍化した。メキシコの輸出工業化率は1970年の水準にまで戻ったが、これは石油価格の下落による輸出減が主な要因である。

これらの国での政策パッケージは、経済の成長実績に影響を与えた最も有力な要因の一つである。輸出主導型成長パッケージは、同時に二つの目標、即ち工業発展と輸出促進をねらっている。

しかし、この二つの目標はまた相反する要素をもっている。工業発展の促進はしばしば関税または数量規制によるある程度の保護を必要とする。これは資源配分の歪みや通貨の過大評価を通じて輸出促進の妨げとなる。これを補償または削減するため、輸出助成の効果ある措置がとられた。工業促進が野心的であればあるほど輸出奨励の必要が一層強くなる。GATT ルールによる相殺関税の可能性は別として、そのような政策措置をどのようにに balan

スさせるかは必然的に経済運営を難しくする。

この点で、工業発展を偏重すればバランスを失うことが、経験から明かである。インフレはその一つの表れである。1980～88年間のラテンアメリカ諸国がまさにそうであった。

## (2) 市場の要素—需要側面

輸出市場は輸出主導型成長にとってもう一つの重要な要素である。主要市場として米国の重要性が挙げられる。米国は、アジア NIES（韓国、香港、台湾、シンガポール）の最大の市場である。ASEAN 4 と中国は全体としては日本向け輸出が多いが、これは主に日本の資源輸入に起因している。しかし、1985年の工業製品輸出では米国が29.0%、日本が22.2%を吸収している。

米州諸国間の貿易ではメキシコの場合、輸出入とも約60%を米国に依存している。またベネズエラの輸出の半分、コロンビアの輸出の42%が米国向けである。同じく対米輸出の割合はペルーで27%、チリでは22%である。ただアルゼンチンだけが15%と低い依存率である。

1970年と1987年のアジア太平洋地域の貿易マトリックス（第1表）によると、この17年間で、世界貿易は全体として3120億ドルから2兆3544億ドルと7.5倍の成長を遂げた。アジア諸国は輸出入ともに、世界平均よりも速い速度で貿易を拡大した。同期間に日本の輸出は11.9倍、輸入は8.8倍伸びた。アジア NIES では輸出27.8倍、輸入21.1倍、ASEAN 4 では同11.2倍、7.7倍であった。中国も同17.1倍、10.9倍の伸びを記録した。

ラテンアメリカ途上国の輸出入の伸びは1970～87年の間、世界平均より低くそれぞれ7.2倍、5.6倍であった。急速な輸入成長を欠いたことが特に重要である。というのは、輸入が資本財の主な源泉であるからである。

米国政府は「双子の赤字」削減の公約をしているので景気の緩やかな後退は避けられない。アジア、ラテンアメリカの発展途上国にとって、どこに拡大する工業製品輸出の市場を見つけるかということが課題である。

ここではとりあえず二つ解答が提示される。第1に、米国の輸入が全般的

に減速しても、アジアの発展途上国は世界のどの国よりも強い競争力をもって米国市場に輸出できるだろう。これはその他の国のシェアに割り込むことを意味する。

第2の解答として、輸出市場の多様化があげられる。ここでは、日本の輸入拡大が不可欠である。日本の工業製品輸入は1985年までは安定的だが緩慢な伸びで、それ以降は急激な拡大をしている。

さらに、有望なのは NIES の地域間貿易及び ASEAN 間の貿易拡大である。両方とも最近増大の兆しがある。分野によってはシンガポールを含むアジア NIES は、ASEAN の中間財輸入先として日本に取って代わりつつある。

### 3. 直接投資と貿易の関係

直接投資は二つの役割をもっている。第1に、それは生産を促進する。雇用及び連関効果が働くとき期待される。第2に、輸出拡大につながる。これは自動的に達成されないが、当該国の労働力と適切な政策パッケージが結びついた時、多くの輸出指向の直接投資が行われる。

発展の初期段階では、輸入代替産業の確立のため直接投資が必要となった。製造工業部門が形成され、輸入代替が進むにつれ、途上国は二つの新しい目標、即ち産業基盤の一層の強化と輸出の促進に直面した。この二つの目標は互いに支援し合うと同時に、また矛盾するため、ほとんどの国は中間路線を選んだ。外国投資による ASEAN 諸国における輸出基地設立の動きは、1970 年代初めから始まった。マレーシアの半導体は最も著名な例である。1985 年以後、アジア主要通貨の再調整後、ASEAN への日本からの直接投資活動が強化された。アジア NIES の投資増加も明らかである。余剰労働力がなくなり、その結果生じた賃金の急上昇に伴い、NIES は低生産性の工業を海外に移転し始めた。

ラテンアメリカ諸国も、このような外国投資政策の導入に立ち遅れたわけではない。周知のとおり、メキシコは1970年代初めに世界的に有名なマキラ

ドーラ方式をスタートさせた。ブラジルも外国資本参加の工場から自動車を輸出し大きな恩恵を受けた。

ラテンアメリカの多くの国ではまだ国内市場指向の投資にかかわっているが、最近の海外直接投資払込み額をみると、若干の変化が現れている。メキシコでは1986、87年と直接投資が目を見張るほど増加し、一方ブラジルでは87年に景気の谷からの回復がみられた。ただしその一部は、債務の株式化によるものかもしれない。

#### 4. アジア及びラテンアメリカ貿易の展望

今後注目すべきは、アジアの発展途上国で現在の急速な輸出拡大が将来も続くかどうか、またラテンアメリカ諸国が輸出主導の成長路線に戻るかどうかということである。

アジア NIES はこれまでも政策転換をうまく行っている。韓国、台湾では深刻な労働力不足から賃金の高騰を招いている。これに対応して、海外直接投資流出が急速に拡大している。広い意味で、経済成長の本質は、雇用促進よりも生産性向上を重視する方向に変わった。これによって、輸出主導型成長の重要性はいささか低下している。

ASEAN は、異なる発展段階を反映して、様々な状況をみせている。ASEAN グループとしては、これからの10年間、開発の新局面に対する準備が必要かもしれないが、労働供給はいまだに多く、輸出主導による成長は少なくとも今後10年間は可能である。

ラテンアメリカも多様化をみせているが、最大公約数として輸出主導型成長の再確立が必要であろう。そのためには、徹底的な政策の見通しが必要である。

もう一つの観点は市場問題である。世界市場はさらに増加する輸出を吸収することができるだろうか。2000年にはアジア NIES、ASEAN からの輸出額は、1987年の輸出額より4000億ドルの増加とみこまれる。これらの輸出は

どの市場に向けられるのだろうか。

1987年の輸出仕向地構成によれば、追加輸出の4分の1、または1000億ドルが米国市場へ向かうはずである。ところがアメリカで4%の輸入増加があるとしても、アジアからは450億ドルの増加しか生まれない。市場シェアの4%増加を見込めば、さらに300億ドルの追加となる。しかし、なお250億ドルが不足する。

日本は急速な輸入増加でこの不足の大部分を吸収することができる。現在、NIES、ASEANからの輸出の15%は日本向けである。これは、言い換えれば2000年には600億ドルの追加を期待できるということである。日本の総輸入が7.5%で増加すると仮定すれば、NIES、ASEANの輸出は670億ドルさらに増える。米国市場の場合と同じように、日本において市場シェアが4%増加すれば新たに160億ドルが生じる。つまり、日本市場は期待を230億ドル上回る輸入を吸収する。これで不足はわずか20億ドルとなり、域内貿易の活発化と、東欧諸国との大規模な貿易の開始で十分処理できるであろう。

ラテンアメリカについては、累積債務と政策変更の必要が不透明なので、このような形の推計は困難である。

第1表 環太平洋地域の貿易マトリックス

(単位: 100万ドル)

		日 本	米 国	アジア NIES	ASEAN4	中 国	ラテンアメリカ 7カ国	世 界
日 本	1970	—	6,015	2,642	1,395	569	498	19,318
	1987	—	84,231	39,300	9,521	8,249	3,669	229,055
	(87/70)	—	(14.0)	(14.9)	(6.8)	(14.5)	(7.4)	(11.9)
米 国	1970	4,569	—	1,485	846	—	4,533	42,590
	1987	26,901	—	15,719	5,551	3,460	25,506	243,610
	(87/70)	(5.9)	—	(10.6)	(6.6)	—	(5.6)	(5.7)
アジア NIES	1970	746	2,029	501	288	33	51	6,380
	1987	20,404	62,497	15,887	10,954	12,032	1,769	177,678
	(87/70)	(27.4)	(30.8)	(31.7)	(38.0)	(364.6)	(34.7)	(27.8)
ASEAN4	1970	1,260	904	789	111	22	24	4,607
	1987	13,386	10,487	10,668	2,067	1,167	140	51,480
	(87/70)	(10.6)	(11.6)	(13.5)	(18.6)	(53.0)	(5.8)	(11.2)
中 国	1970	228	420	533	67	—	2	2,305
	1987	6,392	3,030	15,087	989	—	337	39,464
	(87/70)	(28.0)	(7.2)	(28.3)	(14.8)	—	(168.5)	(17.1)
ラテンアメリカ 7カ国	1970	663	3,585	76	15	4	1,015	11,916
	1987	4,928	36,584	15,087	483	939	5,040	83,116
	(87/70)	(7.4)	(10.2)	(198.5)	(32.2)	(234.8)	(4.96)	(7.2)
世 界	1970	15,401	35,956	6,894	5,413	3,648	11,096	312,011
	1987	135,150	405,206	145,287	41,456	39,806	62,189	2,354,400
	(87/70)	(8.8)	(11.3)	(21.1)	(7.7)	(10.9)	(5.6)	(7.5)

(注) (1) アジア NIESは韓国, 台湾, 香港, シンガポール。ASEAN 4はフィリピン, インドネシア, タイ, マレーシア。ラテンアメリカ 7カ国は, メキシコ, ベネズエラ, ペルー, コロンビア, チリ, ブラジル, アルゼンチン。

(2) 輸出額はFOB 価格。

(3) 1987年データには推定値が含まれている。

(出所) アジア経済研究所貿易データ検索システム。IMF *Direction of Trade* の各号。